

統合医療(全人医療)とワトソン看護論

# 患者中心のヘルスケアシステム構築の基盤

## トランスパーソナルな ケアリング・ヒーリングモデルからの学び

Postmodern Nursing and Beyond

Jean Watson

猪股千代子

# 問い

- ワトソン看護論は、患者中心のヘルスケアシステム構築にどのように活用されうるだろうか。
- 多職種協同、保健医療福祉職がチームでヘルスケアを提供する際の共通の哲学・理念となりうるだろうか。
- 従来の看護を超え、新しく生まれ変わり……  
“人間健康科学”etc になることを社会は求めるだろうか。

# ケアリング

- 関係におけるあり方（ノディングス）
- 乳幼児期の愛され保護される経験に基づく、優しさに対する自然の渴望。ある特定な行為や態勢ではなく、自己と他者との関係における他者への受動的・応答的なあり方（ノディングス）
- 相手の傷つきやすさを守るためのかかわり（ガードウ）

# カリタス因子、カリタス・プロセスの10項目

- Caritas: ケアリングと愛 (Love)、「心」と「科学」の繋がりを結合した実践
- 慈しみ・繊細で尊い関わり＝愛情とケアリングの関係は内的な癒しを示す  
患者や自分自身の実存的な問題に目を向けることに意義がある

# カリタス・プロセス(2002-2007)

カリタス・プロセス(2002-2007)	解 説
1 人間性と利他主義に価値をおき、自己と他者に対しての愛情—親切—平静さを持って実践する	人間愛、こころの静寂さを持って実践すること。 私たちの心の動きは私たち自身のみでなく、周囲の人にも影響を与えることが科学的にも証明されている。したがって、心を開いて、愛すること、親切にすること、心が静寂であることで肯定的なエネルギーが周囲に伝わることから、ケアリング理論のすべての側面に影響を与える。
2 全身全霊をこめてそこに存在すること。自己とケアする者と、またケアを受ける者の主観的世界と、深い信念を支え、可能にすること。看護師が信頼と希望をもたらす患者の前に対峙する。	看護師は患者の前に向かい合い、側に寄り添う事で、安心、信頼、希望を与える。
3 自身のスピリチュアルな実践を育成すること、自己認識を深め、エゴな自分を超える。	自己認識を深めることで、自己に対してのみでなく他者に対しても敏感になる。生涯をかけて磨き続けていくこと。
4 援助—信頼関係にある真のケアリング関係を築く。	表面上の援助関係ではなく、愛を持って信頼に基づく関係を築く。

カリタス・プロセス(2002-2007)	解 説
<p>5 深い心の魂や自己を通して、肯定的な感情のみではなく、否定的な感情表出を支え、表出できるようにするためにそこに居る。それは自己とケアを受ける者の心深いところにある魂をつなぐことでもある。</p>	<p>相手の話にじっくりと耳を傾け、肯定的な感情のみでなく、否定的な感情も自由に表出することを助け、それを受容する。 対象者が肯定的、否定的な感情のすべてを表現できるようにすると、その人が自分で選択肢を考えたり、決断したりすることが可能になる。</p>
<p>6 ケアリングプロセスの一部として、自己、知ること、居ること、行うことなどすべてを創造的に用いた方法をつくりだす。</p>	<p>創造的に問題解決の方法をつくりだす。 技術的、直観的、美的、スピリチュアルな側面や実証的で科学的な知識を総合的に統合し、さまざまな領域からすべての知識を使う必要がある。 患者の背後にあるものは何か、疾患や診断の背後にある心理・社会的、霊的なものは何か、それらを注意深くとらえて目を向ける。</p>
<p>7 ケアリングの関係性の中で教育—学習を行う。</p>	<p>患者の健康維持やセルフケアの向上に目を向けて、コーチングを行う事は一方的に情報を与えること、押しつけること、教えることではなく、患者・家族のニーズに沿うように関係性の中で行われる。</p>

	カリタス・プロセス(2002-2007)	解 説
8	すべてのレベル(物理的、非物理的、繊細なエネルギーと意識の還境)においてヒーリングの還境を創造していく	<p>ヒーリングの還境を創造していく。看護師自身が環境になる。</p> <p>看護師の1人ひとりがつながり、集団としてつながることによって私たちが環境となり、全体に多大な影響をもたらすことができる。つまり心を開いたケアリングの実践を1人ひとりの看護師が行うことによって、その環境に影響を及ぼす。</p>
9	基本的なニーズを援助する	<p>ケアリング実践を行うにあたって、基本的なニーズを充足するための援助で患者の体に触れることがあるが、そのときにたんに触れるのではなく、その人の精神、心に触れるということを意識する。</p>
10	人生—死—苦悩のスピリチュアルな、神秘的な、不可解な側面にも目を向け関心を寄せる。	<p>この世の中の全てに、こたえをもちあわせているわけではない。</p> <p>臨床の中では奇跡的に助かることや、不幸にして亡くなってしまいう事など、現代の科学では解明したり説明したりできない出来事に多々遭遇することがあり、それらにも関心を寄せていく。</p>

# 人間観

- 人格を備えた存在
- かけがえのない人間
- 心 (mind)・肉体 (body)・魂 (soul)を宿した存在
- 個人の各部分を集め合わせても全体としての1個の人間にはいたらないし、各部分の総和とは異なる存在
- 人の一生 (ヒューマンライフ) は、時間的にも空間的にも連続した心・肉体・魂として人が存在する「世界-内-存在 (being-in-the-world)」



# 環境観

- 社会：人の行動を決定づける価値観を個人に与え、個人の知覚にも影響を与えるもの
- 世界：宇宙におけるあらゆる力で、人に影響を与える直接的な環境や状況

# 健康観（健康－不健康）

- 不健康：必ずしも疾患があることを表しているのではなく、内面の自分や魂のレベルでの主観的な不調和で、心・肉体・魂が意識的にあるいは無意識的にぎくしゃくしていること
- 健康：心・肉体・魂が統一されていて調和していること
- 健康の程度：知覚された自分と経験された自分との一致による

# 個人の経験世界＝現象野

- 現象野は本人のみが把握できる個人的でとても主観的な世界
- 他者が共感によって推測する以外に知ることはできない
- 人がさまざまな状況で感じたり対応したりするのは、その人の主観的な現象野によって左右される

# ワトソンの考える世界観

- 看護が人の心・肉体・魂にはたらきかけると考えており、全体論的なとらえ方をしている
- 人と人とのトランスパーソナルといった精神性に触れる次元での、感情やタッチング、言葉、音、色彩、形・・(香り)などを通した、心・肉体・魂の働きを大切にしている
- 自己・他者・自然・宇宙が相互にハーモニーをなすことを追求しており、人間や看護が宇宙のなかでとらえられている

# 看護観

- 看護:健康を増進し、不健康を予防し、病人をケアし、健康を回復することにかかわっている
- 看護(学):一個の人間が職業として行うヒューマンケアのサイエンス・美学・倫理の部分によって解決される人間の健康－不健康という経験および一個の人間に関する人間科学  
(Watson,1988/1992,P76)

